

第二章 養蚕

目次

- 一 養蚕業の変遷
- 二 桑
- 三 蚕の飼育
- 四 繭の出荷
- 五 養蚕にみる社会生活
- 六 年中行事・信仰
- 七 現在の飼育法

一 養蚕業の変遷

養蚕は日本でも古くから行なわれて来たが、それが産業として確立して来るのは近世（江戸時代）中期以降である。飼育法は近世中期まで自然放任的、粗放的であったが、これ以降生糸の商品生産化の傾向が強まるなどの条件によつて、飼育法は集約的となり、養蚕器具の考案、使用も盛んになつて来る。

一八五九（安政六）年の横浜開港は日本の養蚕業にとつても大きな事件であつた。これにより、生糸・蚕種はそれまでの国内市場よりはるかに広大な海外市場を得、日本の輸出品目中の最重要品目としてその需要は著しく増大し、その供給源である養蚕業もこれ以降著しい発展をみるのである。明治三〇年代から大正時代にかけては生糸輸出も順調に伸び、また産繭額も明治末年から大正時代にかけて飛躍的に増大してゆく。こうして昭和初期に至りその最盛期を迎えるが、これ以降は経済恐慌、太平洋戦争などの影響により衰退に向かうのである。福生の養蚕業もほぼこうした全国的な傾向と軌を一にしている。

福生は元来台地上に立地しているため、畑作が中心である。近世

においては畑作物として、大麦、小麦、稗、粟などが栽培されており、養蚕も明治時代ほど盛んではなかつたが行なわれていた^①。明治以後は全国的傾向に従い、また台地畑作地帯という条件も相俟つて養蚕業が飛躍的に発展してゆく。明治二一年七月に脱稿された『福生村誌稿』ならびに『熊川村誌稿』によれば、当時福生村では繭一五石、玉繭三一貫目、屑繭二八貫目、生糸一八二貫目などを生産し、近傍生糸商業者へ販売しており、また熊川村でも繭九八石、玉繭二二貫目、屑繭二〇貫目、生糸八八貫目などを生産している。また『福生町誌』によれば、明治二〇年代には福生であわせて三〇軒余の蚕糸関係の営業（糸繭仲買商、蚕種製造・売買、生糸製造など）が成り立っていたという。また明治三年の春蚕飼育状況は養蚕農家三七八戸、掃立て枚数一、三四枚で、これは当時の農家の八六パーセントが養蚕をしていたことになる。大正時代は春夏秋蚕あわせて三〇、〇〇貫強の産繭量があつたが、この後は不況などによつて養蚕業は衰退する。昭和一〇年には養蚕農家数一五二戸、産繭量二一、〇〇貫とやや下火になり、太平洋戦争に至つては輸出の不振と、食糧増産を目的とした桑園の菜園化などにより、危機的状態に陥つたのである。

戦後はしかし徐々に回復し、新しい養蚕技術も普及したが、戦前の最盛期の状態には戻り得ず、昭和三四年には養蚕農家数二〇〇戸、産繭量五、七八二貫^②であり、現在（昭和五四年）では、養蚕農家は伊藤ヤス家、井上東一家、木村源治家、町田盛彰家のわずかに四軒であり、産繭量は一七〇貫足らずである。

話者の方の話でも、養蚕は大正初期から関東大震災の頃までが一番盛んで、関東大震災では相当の打撃を受けたという（石川定七氏）。またこのほかに、昭和初年頃までは盛んで、盛んな時分には春蚕一蚕で二〇〇貫目の収量をあげた家もあるが、それ以降は下火にな

つていったともいう(井上東一氏)。

現在では若い人達は勤めに出来るので、労働は老年層が中心である。

註① 福生町誌編集委員会編『福生町誌』による。

② 『福生町誌』による。

二 桑

桑の葉は蚕のほほ唯一の飼料であつて、蚕室における蚕の飼育とともに桑の栽培は養蚕の重要な柱である。

(1) 桑園の消長

近世では畑の畔などに桑を植えていたが、明治に入り養蚕業の隆盛に伴い桑園が多く開かれていった。福生の養蚕の興隆に努められた高橋治平氏は明治一八年に開墾地に桑園の新設を奨励し、数十町歩の桑園を完成させた。また明治三七、八年戦役記念事業として、志茂の水田八反歩を桑園とし、以降水利関係の米作に不利な水田は桑園化し、その面積は数十町歩に達したのである。

こうして養蚕の盛んだつた大正時代には福生は一面の桑畑となつた。当時は現在の福生駅前も桑畑であつたという。昭和初期には畑は桑が主であり、麦、陸稻もあつたが、全然比較にならなかつたという。井上東一家でも当時桑畑は一町二反あつたが、田は三反で、麦も作つたが、菜っ葉やナスは買い求めたという。しかし太平洋戦争が始まつてからは食糧増産ということで桑園が菜園に変化していった。また戦後の昭和二四、五年頃には桑園が増えたという。

(2) 栽培方法と品種

桑苗は立川市砂川のものを使つたという。

仕立て方は根刈り仕立てでもあるが中刈り仕立てが多い。中刈り仕立てとは図1のように地面から六〇〇ミリぐらいのところにかブタ(株)を作り、ここから枝条を出すものである。畝間は五尺(約一・五メートル)、株間は三尺五寸(約一・〇五メートル)で、この間隔は昔から変わらないという。

現在養蚕をしておられる井上東一家(熊牛)の桑の品種をみると、わずかながら市平などもあるが、鼠と一の類が大半を占めてい

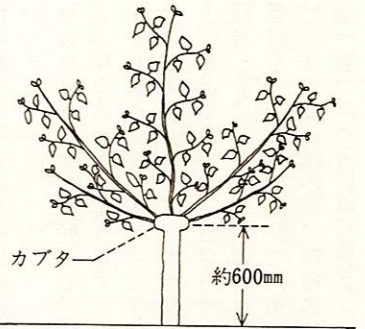


図1 中刈り仕立て



写真1 桑園

(写真1)。昔は早生十文字、フツジユウ、甘桑、魯桑、ゴシヨエラミ、市平などいろいろあり、大正時代にはゴシヨエラミを最もよく使つたが、昭和に入つてからは鼠、一の類を使うようになったという。鼠はよい繭が出来るが、市平は繭の質がよくないという。蚕は桑の良し悪しを心得ていて、よい葉から先に食べるといふ(井上東一氏)。

(3) 桑の種類

桑には蚕期と蚕齢にあわせて、春秋兼用桑(ハルゴックワともいふ)、以下この章では兼用桑という)と、秋蚕専用桑(アキゴックワともいふ)、同様に専用桑という)の二種類があつた。なお秋蚕には初秋蚕、晩秋蚕、晩々秋蚕が含まれる(三―(2)飼育回数項を参照して下さい)。

兼用桑は春蚕、秋蚕などの全ての蚕期に桑葉を収穫するもので、専用桑は秋蚕(特に壮蚕期)のみ収穫する。専用桑を必要とするのは、五齡期などの蚕の食桑量が大きい時に兼用桑だけでは桑葉が不足するからである。また桑葉の出方により採桑法が異なるため、ここで兼用桑、専用桑の双方における葉の出方についてみてゆくとにする。

兼用桑は春蚕期には図2のように株から枝条が数本出ている(図

2では簡単のために二本とした)が、さらに葉が数枚ほどついた芽(ア)が枝条から出ている。また一本の枝条の中では、先の方は葉の勢いがよく葉がたくさん出ているが、株の近くでは芽(イ)はあるが、芽アのようにには出ない。春蚕期に図2中のAでクワキリガマを用いて枝条を伐採し収穫すると、芽イが伸びてその年の秋には枝条となり、この枝条から葉が一枚一枚出る。図3は秋蚕期における兼用桑の開葉している状態を示す。兼用桑の葉は初秋蚕の頃は小さいが、晩秋蚕の頃には成長して厚く大きくなっている。秋蚕期にはこの桑葉をツメを用いて一枚一枚摘む。また葉が枝条から分かれているところに芽(ウ)が出ているが、これは翌春図2にみられる芽アとなる。

専用桑は秋蚕期にのみ収穫するため、冬切りといって三月彼岸頃のまだ芽の出ないうちに、桑切り鎌を用いて株の近くで枝条を切ってしまう。秋にはそれぞれの枝条から大きな葉が一枚一枚出ているのでこれを収穫する。兼用桑、専用桑とも、兼用桑は兼用桑園、専用桑園は専用桑園として一括して栽培される。(なお桑葉の収穫の仕方については、三(3)ザソウ5)採桑の項を参照して下さい)

(4)桑園の管理

1)除草と施肥 草取り(草掻き、除草)は草が出た時に行なうのが特に期日は定まっていらないというが、昔は三、四月頃に一回、一月頃に一回と年二回行なうたという。このうち三月の草

取りは五月に一回草取りをする。このほか七、八月頃にも一回行なうてもよいという。草取りには昔はジョレンを用いたが、現在はオカメ(オカメジョレンともいう、写真2)を用いる。その方法は次の通りである。

桑の根元よりも畝の土が高く盛つてある時は、畝の土をジョレンで桑の根元へ掻きおろす。このことをモリカケというが、土を掻きおろすことによつて除草するのである。このモリカケを一年のうち二回ほど続けて行なうと、今度は桑の根元の土が畝だつたところよりも高くなる。この時はモリカケとは逆に桑の根元から畝だつたところへ土を移動させながら除草する。このことをハキダシという(井上東一氏)。

桑には毎年二、三月頃に一回必ず肥やしをやるが、このほか春蚕あけてすぐの時にも一回やつてもよいという。化学肥料が普及するのは大正末から昭和初期にかけてで、それ以前の肥料はクズ、人糞、米糠、粟灰、豆いた(豆の粕)、ホウネン(豆いたを細かくしたのもの)、油粕、魚の搾り滓などであり、これらは堆肥として使った。このうち、豆いた、ホウネン、油粕、糠などは肥料屋から購入した。クズとは落葉のことで、正月から三月半ばの間の一週間ほど落葉はきをした。これをクズハキと

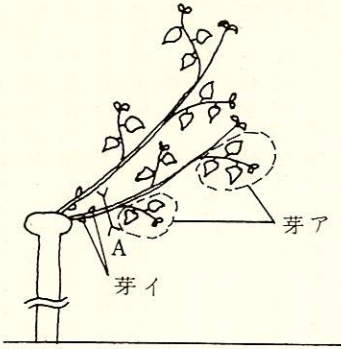


図2 兼用桑春

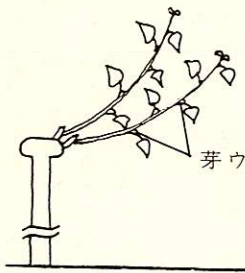


図3 兼用桑秋

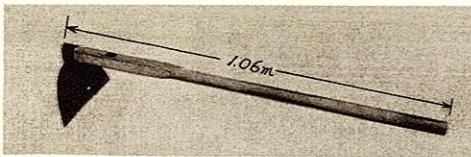


写真2 オカメ

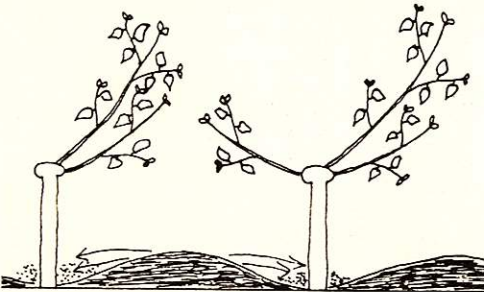


図4 モリカケ

いう。南の細谷市蔵氏は拜島の上の方のヤマヘクズハキに行ったという。クズはクズハキカゴにつめ、手車に載せて家まで引いて来るが、一日に六籠くらいはくので、一週間で四〇籠近くはくことになる(このほか、シリアゲの時に得られるコクソ(蚕糞)を肥料として桑園に撒くが、これについては三(3)ザソウ(9)シリアゲの項を参照して下さい)。

大正末から昭和初期にかけて化学肥料が普及したが、これらは硫酸、過磷酸、燐酸、塩化カリ、硫酸カリなどで、肥料屋から購入した。後に片倉製糸の工場が熊川に出来てからは、片倉で作った片倉肥料という桑園専門の肥料を養蚕組合で購入して使った。これには化学肥料はもちろん、豆いたや蚕の蛹を粉にしたものなどが混ぜていた(細谷市蔵氏)。

肥料をやった桑は葉が厚く、繭もよいものが出来る(井上東一氏)。
2)桑の植え換え 古い桑は植え換えを必要とするが、以下はその昭和初期における模様である。新しい桑苗を桑畑の畝の部分に植え、古い桑は引き抜くが、桑苗を植えて二年目の春蚕までは古い桑から収穫し、その年の秋から新しい桑の収穫を始める。古い桑は新しい桑を植えて二年目の春蚕に収穫した後、根元を鋸で切ってしまう。暮から二月の間に取り去る。古い桑の植わっていたところは新しい畑では畝となる。このほか桑を引き抜くのに、春蚕収穫後の桑にワイヤーを巻きつけて引き抜く抜根機という機械も使った。これは当時役場などで貸してくれたという。植え換えは一回で畑全部の桑を植え換えるのではなく、一回の植え換えて畑の半分か三分の一を植え換え、残りは翌年、翌々年に行なう(井上東一氏)。

(5)桑の売買

天候が悪くて桑に実が入らなかつたり、しんが伸びないなどという時は、自家の桑園だけでは桑が不足することがある。こうした時は桑をス(桑の市場のこと、熊川神社の横の野島弥七氏のところでスを開いていたという)へ行って買ったり、シロで買ったりして不足分を補う。シロで買うとは、他人の桑園へ行き持ち主と桑の売買の交渉をし、その場で買うことをいい、この桑はその後自分の好きな時に切りに行く。またスには仲買師があり、仲買師は桑を売

ることを目的に作っている家に行き、そこでシロで買って来た桑をスへ出す。スにはこうした桑が束になっていて、これを桑の不足している人が買う。

註① 『福生町誌』による。

三 蚕の飼育

(1)飼育法の変遷

飼育法には時代、地域により様々なものがあるが、明治時代末期から昭和初期にかけては、全国的に剝桑育(はくそういく)が普通飼育法として普及していた。この方法は一蚕の全飼育期間にわたって蚕架と蚕箔を用い、稚蚕期には剝桑を給桑するというものである。

昭和に入ると、飼育法はこの剝桑育からいろいろな方式のものに変化した。その中で特に顕著なものは、壮蚕条桑育(たうさんじょうそういく)ともいう)と呼ばれるもので、これは壮蚕期の給桑に際して、桑条(桑の枝)を与えるもので、蚕糞などの除去回数が少ないなど、著しく省力的な方法である(この場合、稚蚕期には剝桑育と同じように桑葉を細かくきざんで与える)。

福生においては、早くは昭和初年の頃、この壮蚕条桑育に移行したといわれるが、それ以前はザソウといって前述した剝桑育が一般的だったようである。もちろん、飼育法の変化は各家庭の事情によるところが大きく、福生という地域の中でも変化の遅速は様々である。たとえば、昭和初年に早くも剝桑育から条桑育へ移行したところもあれば、昭和四〇年代に剝桑育を行なっていた例もあるのである。だから、変化の時期については一概にはいえないが、一応全体的にみると、昭和初年までは大抵の家で剝桑育(ザソウ)が行なわれ、早いところではこの頃から壮蚕条桑育に移行し、特に太平洋戦争中に若者が村から出て行ってしまい、人手不足になった頃から条桑育が普及し始め、戦後は大体条桑育に移行したということである。現在は年間条桑育といって春蚕、晩秋蚕ともに条桑育であるが、条桑育が始められた頃は春蚕のみ条桑育を行なっていた。

このほか、稚蚕期の蚕を共同で専門的に飼育する稚蚕共同飼育が

導入され、現在福生では、稚蚕期は稚蚕共同飼育所で飼育し、壮蚕期は各養蚕農家が条桑育を行なうという全国的に普及している飼育方法が行なわれている。

(2) 飼育回数

ザソウの行なわれていた当時、福生の養蚕農家の多くは、春蚕、初秋蚕、晩秋蚕と年に三回蚕を飼育した。このほか、春蚕と初秋蚕の間に夏秋蚕、晩秋蚕の後に晩々秋蚕があつたが、福生ではこのどちらもあり行なわれなかつたようである。なお秋蚕という時、初秋蚕、晩秋蚕、晩々秋蚕が含まれる。初秋蚕はまたイチゴともいう。各蚕期の日程は家によつて様々であるが、平均的と思われる日程を図5に掲げる。このうち特に初秋蚕の蚕期が短い、これは飼育時期が夏に当たり暖かいからである。「わからず屋に借金するより初秋の方が早い。」という諺もあり、これはわからず屋に借金しよ

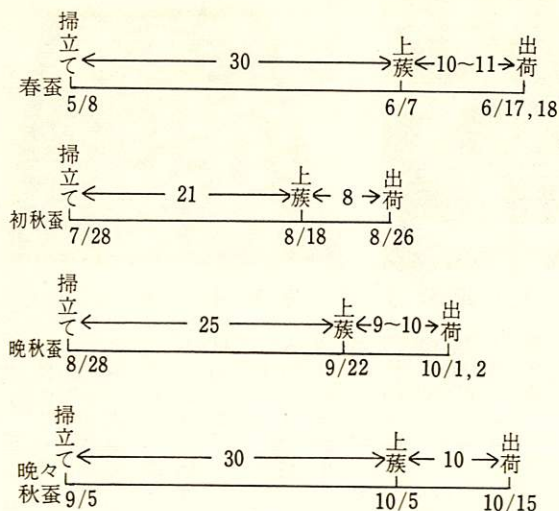


図5 各蚕期の日程

うとして、春蚕、初秋蚕の方が飼育が短く、現金がすぐに入るといふことをいつていふのださうである。晩々秋蚕を行なうとすると晩秋蚕と蚕期が重なつてしまふが、この時は晩秋

蚕と晩々秋蚕を同じ室では飼わず、たとえば晩秋蚕を一階で飼うなら晩々秋蚕を二階で飼うという方法や、同じ室で飼う方法があつた。

現在は春蚕と晩秋蚕の年二回の飼育を行なう。

次にまず戦前の福生で一般的だつたザソウの飼育方法について述べ、後に条桑育、稚蚕共同飼育に触れる。またザソウについては春蚕を中心述べる。

(3) ザソウ

1) 準備 四月中旬から五月初めの天気の良い日を選んで、蚕具を近くの水のあるところで洗う。水のあるところならどこでもよく、家の井戸水でも洗つたが、昔は多摩川の水量が豊かだったので多摩川へ洗に行つた。洗う蚕具は家によつて異なるが、細谷市蔵家では、カゴ、タテジ、縄網などは毎年洗つたが、糸網は大して汚れなかつたので洗わなかつた。また蔭（まじ）やムシロなど上簇の時に使うものは幾度も洗わなかつたという。これらは洗い終わつたら乾燥させてその日のうちに取り入れる。細谷氏によると、蚕具は原則としては春蚕だけでなく各蚕期の前に洗うべきだが、ほとんどの家では春蚕の前だけで、初秋蚕、晩秋蚕の頃は洗わなかつたという。細谷市蔵家でも初秋蚕、晩秋蚕の頃は蚕具を雑巾で拭く程度であつたという。もちろん、病蚕が出て違ふ時洗つた。

蚕具を洗つてしまふと、ススハライといつて、室や桑室の大掃除を行なう。ススハライが済むと、シツコサエといつて、室の中に蚕を飼育する設備を備えつける。シツコサエは掃立て二、三日前には行なつた。細谷市蔵家の場合を例にとつてみると、イッピツ（一部屋）は二間（約三・六メートル）×二間（約四・五メートル）の一〇畳で、二間の側の両側

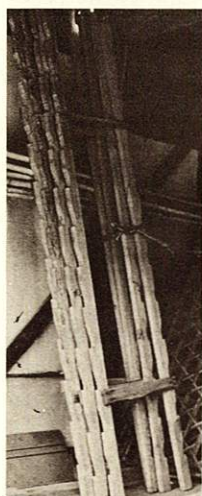


写真3 タテジ

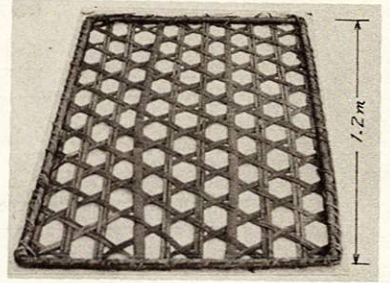


写真4 カゴ

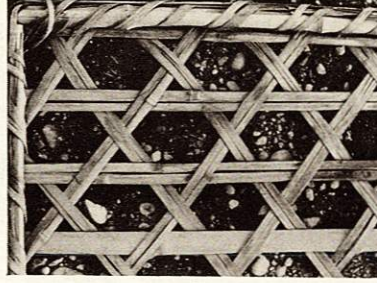


写真5 カゴ (部分)

つたり、目貼りをして室を密閉し、ホルマリン消毒をする。湯気で消毒する場合は消毒するの半日はかかるが、消毒が済んだらウシロマエをあげて風通しをよくする。また酢酸を用いて消毒したことあるという。消毒も初秋蚕、晩秋蚕も含めて各蚕期に行なえばよいのだが、春蚕だけやつていたという(細谷市蔵氏)。

消毒が済んだ頃に蚕種が届く。蚕種紙といつて、紙の上に蚕卵を

にタテジ(写真3)をそれぞれ三本ずつ立てる。タテジとは長さ二・三メートルほどの木製品で、両外側に十二、三か所の切り込みが入っているもので、この切り込みに長さ四・五メートルの竹(スベリダケという)をさし込み、縄で結わえる。この竹の上にカゴ(約八〇〇×一、二〇〇ミリ、竹製、写真4、5)をさすが、一段にはカゴを四枚さすことが出来、一〇段ぐらいまでさすので、一側で四〇枚、二側で八〇枚のカゴを使用する(上が二、三段あくが、これは普段は使用せず上簇の時に使用する)。蚕を飼育する時は、カゴの上に蚕座紙を敷いて飼育する。またカゴの横の長さは約一・二メートルであるので、蚕座と蚕座の間の部屋の中央部が一・八〜二メートルほどあき、このあいた部分でクワクレヤシリアゲなどの作業をする(図6)。こうしてサンダンを作り、室の中に蚕具(特に稚蚕期に必要なとする蚕具)を入れ、紙帳をは

産みつけたものが届いた。春蚕は掃立ての二、三日前に、初秋蚕はお盆時分(七月一五日頃)に届いた。届いた蚕種紙はすでにこさえてある室の中に入れ、サンダンの竹の上か給桑台の上かにカゴ二枚載せてその上に置いておく。稀にシツコサエが終わらないうちに蚕種紙が届くことがあるが、この場合は蚕種紙を家のどこに置いてよく、室が出来れば室に入れるが、こうしたことはあまりなかったという。蚕が頭か二頭孵化し始めたところで蚕種紙をハトロソ紙にくるむ。こうして二日ぐらいすると全部いつせいに孵化して来る。全部が孵化したところで掃立てを行なう。

蚕種は片倉の製糸工場が出来てからは片倉の蚕種が相当出回ったが、それ以前は蚕種屋で催青したものを使つた。蚕種屋が回つて来た時に、養蚕農家で春蚕は何グラム、秋蚕は何グラムほしいといつて注文した。また、いつかばきといつて、養蚕農家が何月何日に掃立てを行なうからと、掃立て予定日を蚕種屋へ伝えておけば、蚕種屋の方では卵がいつせいに孵化してその予定日に掃立てが行なえるように調節した蚕種を養蚕農家へ届けた(たとえば、五月八日に掃立てをしようという時は八日掃きという)。蚕種代を支払う時期は蚕種を注文した時、上簇の前、上簇の後などまちまちであった。

はじめは養蚕農家が直接蚕種屋に蚕種を注文していたが、後に養蚕組合でまとめて注文するようになった(細谷市蔵氏)。

蚕種屋は福生で三〇軒、西多摩郡では一〇〇軒ほどあったという。また、蚕種仲師といつて、蚕種屋と養蚕農家の間にいて蚕種を売る商人がいた。しかし蚕種仲師の蚕種はあまりいいものではなく、蚕

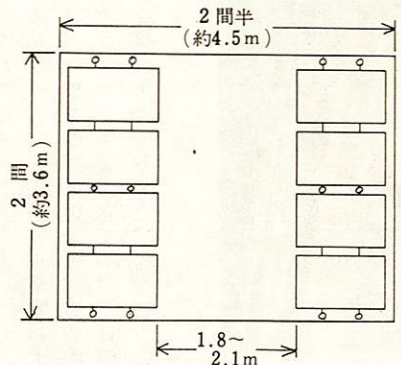


図6 室の状態

種屋の蚕種の方がよかつたという。

2) 掃立て 蚕卵がいつせいに孵化したところで掃立てを行なう。春蚕では五月八日頃である。まずハトロン紙を敷きその上に蚕種紙を置く。蚕種紙の上に細かくきざんだ桑の葉をふるってかける。蚕が桑の葉にたかつたところで蚕種紙をひっくり返し、羽根ボウキのケツ(柄のこと)で蚕種紙を後ろからはたき、桑の葉と蚕とともにハトロン紙の上に落とす。ハトロン紙の上の蚕を羽根ボウキで調整して、カゴに載せる(細谷市蔵氏)。またこのほか、孵化した稚蚕に粟糠をふりかけ、その上へ細かくきざんだ桑の葉をフルイでふる

いながらかけ、桑の葉の上に蚕がよくたかつたら、羽根ボウキでカゴの上に敷いてあるハトロン紙の上へ掃き落とすという方法もあつた。

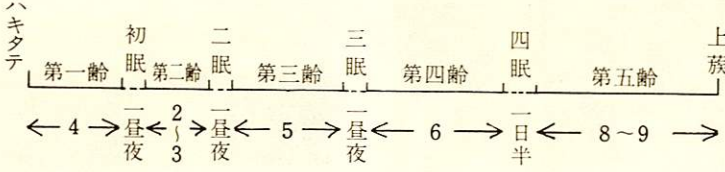


図 7 春蚕の日程

3) 蚕齡 掃立てから四日ぐらい桑葉を与え続けると桑を食はずに動かなくなる。これは眠(またはトマル)といつて、蚕が脱皮をするのである。蚕は一蚕のうちに四回脱皮をする。最初の脱皮を初眠といひ、以下二眠、三眠、四眠(または大眠、オオドマリ)という。初眠、二眠、三眠は一昼夜ほど続き、大眠は一日半続く。掃立てから初眠までの間を第一齡(約四日)、初眠と二眠の間を第二齡(約二〜三日)、二眠と三眠の間を第三齡(約五日)、三眠と大眠の間を第四齡(約六日)、大眠から上蔭までを第五齡(約八〜九日)という(図7)。齡が進むに従つて蚕は成長し、五齡期は食桑量が非常に多い。

大眠から起きて九日ほどすると、蚕は桑を食べなくなり蚕体が透き通つて来る。このことを蚕がヒキルといひ、このようになつたら上蔭を行なうのであるが、掃立てから上蔭に至る間には採桑、調桑、クワクレ、シリア

ゲなど様々な作業が行なわれるので、次にそれらについてみてゆこうと思う。

(なお本章には、稚蚕、壮蚕という言葉が出て来ますが、これについて一般には「一齡から三齡までを稚蚕、四〜五齡を壮蚕」といいます。しかし本章では、稚蚕という時は一、二齡を中心とし、壮蚕は四、五齡をさすものとして使用しました)

4) 飼育温度 蚕の飼育温度は蚕齡に従つて大体決まっています。現在では「一般に稚蚕は比較的高温多湿で、壮蚕は比較的低温乾燥の環境が適している」といわれる。

福生では大正時代半ばはハケダ流といつて空気の流通をよくする方法を行なつていたが、大正末頃から室を目貼りして密閉し暖房(補温)する密閉という方法に変わった。春蚕の稚蚕期では暖房するため室を密閉したが、壮蚕期は開放する。早い家では三眠ぐらいから開放したが、大眠すぎの桑ツケの頃に開放する家もあつた。初秋蚕では開放する家も少ない家もあつた。晩秋蚕では半密閉といつて密閉してもかたくはしなかつた。

暖房用具としては蚕室にきつてある炉や、カイコヒバチ(写真6)、レントンコンロ(写真7)があつた。カイコヒバチは中に炭を入れるが、上に藁灰をかけて長持ちするようにする。練炭コンロは高さ約三六五ミリで、七寸ぐらいの練炭を入れ、蚕室の中央に置く。

昔は換気のために屋根に破風(三角の風抜き)がついていた。屋根は麦殻だと熱が逃げてよくない。トタンの方がよいとい

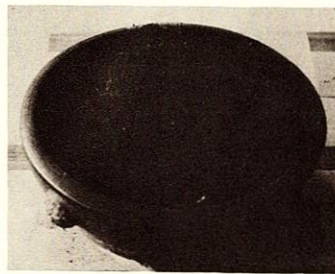


写真6 蚕ヒバチ

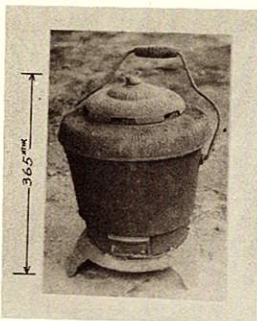


写真7 練炭コンロ

採する（写真9、なお写真9は井上東一家の桑園の現在の状態である）。桑切り鎌は普通の鎌と違い刃の部分の部分が短い、麦や陸稲ではなく桑のズイ（枝）を切るのだから刃の部分が短い方がよいという。この時株に近い芽は残す（この芽が伸びて秋には枝条となる）。芽を残しつつもなるべく株の近くで伐採する。こうしないと株の形が崩れてゴツゴツしてしまい、桑の樹形が悪くなるからである。畑で伐採した枝条は手車（大八車）、馬力（大八車より大きい荷車で馬がひくもの）、ウシグルマ（牛がひく、写真10）、リヤカーなどに



写真10 ウシグルマ

（写真8）を用いて伐

とでは採桑の仕方が異なっている。次に各蚕期における採桑の仕方についてみてゆく。

春蚕は春秋兼用桑から採桑する。兼用桑は春には枝条が伸び、その枝条からさらに芽が伸びて葉を盛んにつけている。畑でこの枝条を株の近くで桑切り鎌

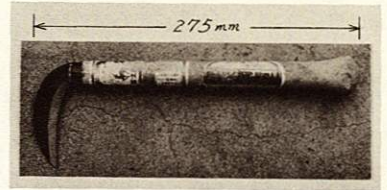


写真8 桑切り鎌



写真9 伐採後の状態

5) 採桑 蚕に桑葉を与えるには桑葉を収穫せねばならない。これを採桑というが、二(3)桑の種類のところのみたように、桑には春秋兼用桑と秋蚕専用桑の二種類があり、また春蚕と秋蚕

載せて家へ運ぶ。家へ運び入れた枝条は一時クワバ（または桑室という）へ貯桑する。桑切りは朝と晩の二回行なった。日中は暑くて桑がしなびてしまうので、暑くならないうちに桑切りをする。また湿った桑はよくない。特に大眠起きて五日目にもなると桑葉を食べる量も非常に多くなり、こうした時翌日雨でも降ると桑が湿ってしまう。そこで、そうした時は翌日分もあわせ二日分の桑を切っておく。

秋蚕は春秋兼用桑、秋蚕専用桑の両方から採桑する。初秋蚕、晩秋蚕は続いているので、同じ枝条から出ている桑葉を採桑する。初秋蚕では一本の枝条のうちの株に近い葉を採桑する。枝条の先の方に残った桑葉は晩秋蚕の頃には成長し大きな葉になっているので、晩秋蚕ではこの部分の葉を採桑する。これは兼用桑、専用桑とも同様に採桑する（図8）。

二(3)桑の種類のところ、専用桑は壮蚕期の食桑量の多い時期に収穫すると述べたが、次に兼用桑と専用桑との採桑の仕方についてみてゆく。

兼用桑は翌年春蚕期に伐採収穫するため、芽（図3における芽ウのこと）を残しておかねばならず、秋蚕収穫時にこの芽をいためなようにすることが肝要である。このため採桑する際はツメ（図9）を用いて葉を一枚一枚摘み取る。しかしこの方法は多大な労力と時間を必要とし、壮蚕期の桑が多量に必要な時には兼用桑だけでは桑

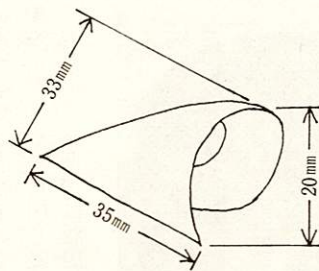
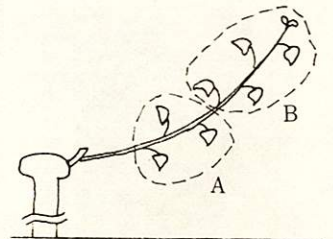


図9 ツメ



A…初秋蚕期に採桑
B…晩秋蚕期に採桑

図8 秋蚕の採桑法

が不足することが多い。このため専用桑を必要とするのだが、専用桑は翌年春蚕期に収穫しないため、葉のものとところにある芽をいためてもかまわない。そこで、採桑する際は葉を摘まずに、素手で葉を抜き取るのである。こうすると葉を摘むよりはるかに短い時間で多大の収穫をあげることが出来る。専用桑は秋蚕の壮蚕期で食桑量が多く兼用桑だけでは桑が不足する時に採桑し、桑の不足分を補うのである。いつ頃専用桑を採桑し始めるかは、家々の専用桑の多寡による。専用桑を多くもっている家は四輪から専用桑を給桑し始めるが、一方では大眠までは兼用桑を給桑し大眠起きから専用桑を給桑し始めるという家もある。

秋蚕の場合、畑で収穫した桑葉は兼用桑、専用桑とも同様に次のようにして家まで運ぶ。たとえば兼用桑の場合は、桑畑でツメで一枚一枚摘みとった桑葉を腰に下げているクワツミビク(写真11)に入れ、クワツミビクがいつぱいにな

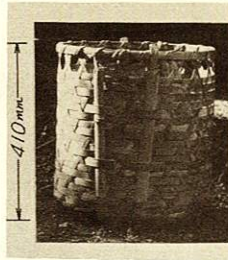


写真 11

ツク つたら畑に置いてあるクズハキカゴワビ(写真12)へ桑葉を移す。こうしていつぱいになつたクズハキカゴを幾つか手車やリヤカーに載せて家まで運ぶ。

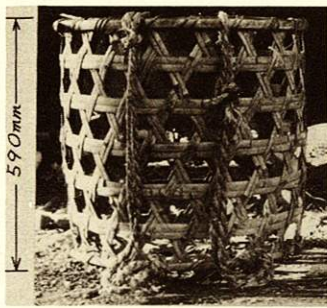


写真 12 クズハキカゴ

6)貯桑 採桑した桑葉をきざさんだり、給桑したりする前に、一時的に貯桑する場所を福生ではクワバ(桑場)とか、クワシツ(桑室)という。大抵の家では桑場は蚕の時だけ即製で設けるので、特定の施設はなかつたようである。しかし蚕を盛んに行なう大きな家では地下室のような穴倉(ムロという)を設けてあり、ここを桑場として利用したという。また土蔵を桑場

細谷市蔵家では物置きを蚕の間だけ桑場として利用した。それ以外の時は麦束などを入れた。桑場は清潔でなければならぬ。もし麦ダニなどがいると蚕が全滅するおそれがあるので、蚕を始める前には物置きを掃除し消毒する。桑場の土間にはムシロを敷く。桑場には風が入ってはいけなないので、風よけとして周囲に障子や戸を立て囲いをする。春蚕では桑の枝条をまとめてさかさかさに立てておく。秋蚕では葉のまま貯える。

井上東一家では貯桑場所は二か所あって、一方は八畳の小屋でこれは母屋の外にあった。しかし五齢期になると貯桑するにはこたけでは足りなくなるので堆肥小屋にも貯桑した。

7)調桑 ザソウを行なっていた頃は現在と違って桑葉をきざさんで蚕に与えた。

春蚕では桑場に枝条が貯えられており、桑葉をきざむ前に桑場で枝条から芽の部分(葉が数枚ついている)をクワコキを用いて抜き取る。クワコキには腰かけて桑抜きするもの(写真13)と、それを手に持って桑抜きするもの(写真14)との二種があるが、腰かけて桑抜きするものは金具に枝条を根元からさし込み、手前にひいて芽を落とす。手に持って桑抜きするものはクワコキの中に枝条をはさみ、枝条に従ってクワコキを移動させて芽を落とす。手に持って桑抜きするものの方があつかいやすいのでこちらが普及した。男衆なら枝をさかさかさにして素手でもいでもいいが、女衆では無理である。しかしこのクワコキ(写真14)を用いれば女衆でも桑抜き出来る。枝条からこのように芽が出ているの

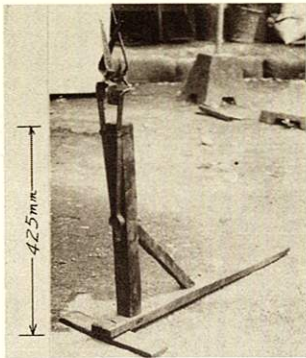


写真 13 クワコキ



写真 14 クワコキ

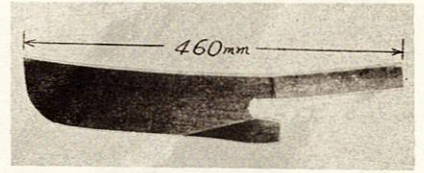


写真15 桑切り包丁

かれてゆく。

また春蚕掃立て直後はやわらかいしん芽をかいてきて細かくきざんでくれたという(細谷市蔵氏)。なお細谷氏は桑葉を短冊状にきざんだという。

桑をきざむ道具としてはまな板(三尺四方ぐらい)と包丁(桑切り包丁、写真15)、剉桑器(桑切り器械)が挙げられる。一、二齡の頃は桑葉もさほど多くを必要としないし、また細かくきざむのでまな板の上に芽または葉を載せて包丁できざむ。壮蚕期になると桑葉の量もだんだん増えて来るのでこの頃から大眠までは剉桑器を用いる。

剉桑器には右側に包丁がついていて、左側に幅約三〇〇ミリ、長さ約一、〇〇〇ミリの箱がある。この箱の中に春には桑の芽を、秋には葉を入れ、上からふたをして左手で押える。右手で包丁を上げ下げして桑をきざむが、剉桑器にはメドがついていて、きざみたい大きさをそれに合わせておけば、包丁と連動してまな板が移動し、これに伴い桑も移動して望みの大きさにきざむことが出来る。剉桑器を使用する時期もいつからいつまでと決まったものでなく、蚕をたぐさん飼う家では二齡でもまな板と包丁だけでは間に合わないので剉桑器を使うという(細谷市蔵氏)。

は春だけなので桑扱き作業は春にのみ行なわれる(秋は葉は枝条から一枚一枚出ている)。

こうして得られた芽や葉をきざむのだが、蚕にきざんだ桑を与えるのは春蚕、初秋蚕、晩秋蚕とも一齡から四齡までで、五齡はいずれの蚕期もきざまないものを与える。きざむ大きさは蚕の成長に合わせて大きくしてゆくが、井上東一氏によれば春蚕、初秋蚕、晩秋蚕とも一齡は五ミリ四方、二齡は一〇ミリ四方、三齡は二〇ミリ四方、四齡は四〇ミリ四方と大体倍々に拡大するという。春蚕の五齡にはクワコキで扱き落とした芽(全芽という)をそのままくられてゆく。初秋蚕、晩秋蚕の五齡期では葉を一枚一枚

8)クワクレ(給桑) 蚕の食糧である桑を与えることをクワクレ(給桑)という。

春蚕では一日のうち朝桑、昼桑、夜桑と三回給桑する。蚕の成長に従って食桑量は増加するが、給桑回数には変わりなく一齡から五齡の最後まで一日三回で、一回の給桑量が増加していくにすぎない。五齡のうち大眠起き四日目ぐらいまではあまり桑を食べないが、五日目以後から食桑量が増加し盛んに桑を食べるようになる。これを五齡の食い盛りという

が、この時も給桑は一日三回で、なお桑の足りないところがあった場合はマシグワといってさらに給桑をする。初秋蚕では一日五回給桑する。陽気が暑くて桑葉の乾燥が早いので、桑葉を薄くくられて回数を多くするのである。晩秋蚕ははじめのうちは一日四回ぐらい給桑するが、その後は涼しくなるので三回となる(井上東一氏、細谷市蔵氏)。

また掃立て後は一日につき七、八回、二眠頃は一日につき四、五回、大眠頃は一日につき三回ほど給桑する(森田惣助氏)という方法もある。

給桑の仕方は次の通りである。給桑台(クワクレ台、写真16)を室の中央のあいている部分の両端に一つずつ置き、一つの給桑台に一人がついて、カゴをサンダンからひき抜いて給桑台に載せてクワクレをする。一部屋にカゴが八〇枚さしてあるとすれば、二人で給桑して一時間はかかる。一枚のカゴに対する桑葉の量を秤で計って桑をくれていた家もあるが、目見当でくれていた家もある。

明治末頃までは一齡から五齡まで桑葉をフルイでふるって来ていたという。フルイは竹製で、蚕の成長にあわせての大きさが違っていた。フルイを用いたわけは、桑の軸を与えなくてよいからとも、平らにくられるからともいう。



写真16 給桑台

しなびた桑はオコサマ（蚕のこと）は食べない。一、二齢の頃は蚕座にハトロン紙をかけておくと風が入らず桑がしなびなくてよいという（細谷市蔵氏）。

また眠座（とまり座）は乾燥していることが望まれるので、眠の前の給桑時には水つ気の少ない市平を用いた。

9) シリアゲ（除沙） 蚕を飼育していると蚕座にコクソ（蚕糞）や残桑（食べ残した桑）などがたまるが、ためたままにしておくと蚕座が多湿状態になり、また重くもなつて給桑の時などカゴの出し入れが骨折りになるのでたまつたコクソなどをとる。このことをシリアゲ（除沙）という。

一蚕のうち何回シリアゲするかは蚕座のコクソなどのたまり具合によるが、大体一齢では眠（初眠）に入る前に一回行なう。これをトメウラ（眠除）という（除沙のことをウラという）。二齢では蚕が脱皮して起きたところで一回（これをオキウラ、起除という）とトメウラ一回行なう。三齢ではオキウラ、トメウラ一回ずつのほか、この間にナカウラ（中除）を一回行なう。四齢では一日一回くらしいシリアゲし、五齢では一日必ず一回はシリアゲをする（井上東一氏）。春蚕でも秋蚕でも回数と同じである。

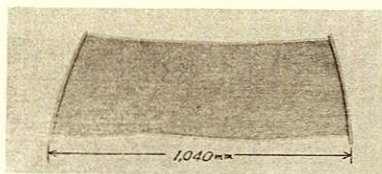


写真 17 一枚掛け糸網

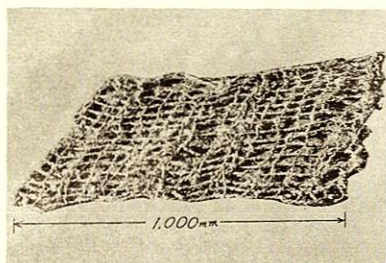


写真 18 縄網

シリアゲには網を使用するが、網には二種あつて、一齢から四齢までは一枚掛け糸網（約六六〇×一、〇四〇ミリ、写真17）を用い、大眠のとめつ

けとそれ以後五齢の最後までは縄網（約五七〇×一、〇〇〇ミリ、写真18）を用いる。また一枚掛け糸網には細かい稚蚕用のものと、めが粗い壯蚕用のものと二種類ある。縄網は自家製が多かつたが購入することもあつた。糸網でも縄網でもシリアゲの仕方の違いはなく次のようにして行なう。

たとえ一日に朝桑、昼桑、夜桑の三回給桑する場合、夜桑をくれる前に網をかけ、その後夜桑をくれる。翌日朝桑をくれ、桑切りに行き、大体午前〇時頃にシリアゲをする。網をかけて二回ほど給桑すると蚕は大体網の上上がる。蚕が大体網の上上がつてからシリアゲをする。蚕座には前回のシリアゲの時の網が一枚残つており、夜桑くれる前にも網をかけるので、シリアゲする直前には一枚のカゴに網が二重にかかつている。シリアゲをする時は給桑台を二台用意する。はじめにカゴに蚕座紙を敷いただけの新規の座を一つ作り、これを一方の給桑台の上に置く。もう一方の給桑台へサシダンにささつてあるカゴをひき出しこれを置く。このカゴは前日に網をかけておいたもので、前述のように網は二重になつてゐる。この上の方の網を二人で端と端をつまんで持ち上げ、新規の座へ移し、このカゴをサシダンへさす。古い方の座にはまだ網があるが、この網は座の上でふるつてコクソを落として縁側へ出す。コクソも縁側から捨てる。これで古い座にはコクソはなくなり、カゴに蚕座紙を敷いただけの新規の座となる。このように、最初新規の座を一つ作つておき、今みた作業を繰り返して、全ての蚕座のシリアゲを行なうのである。縁側に出した網はシリアゲが終わつてから天日に干して乾かし、次回のシリアゲのために、夜桑くれる前にカゴに入れる網として使う。普通は天日で乾かすが、天気が悪くて干せない時は湿つていても使う。コクソは五齢の五日目（食い盛り）で、カゴ八〇枚あたりリヤカー二台分は出るが、これはその日に桑畑へ持つてゆき肥やしとして撒く。

またカゴ八〇枚のシリアゲをするのに、二人で一時間から一時間半はかかつたという。

10) 分箔 蚕は成長に従つて体が大きくなる。一定の面積の中で飼育し続けると厚飼いとなり、蚕が桑を充分食いこめなくなるため、

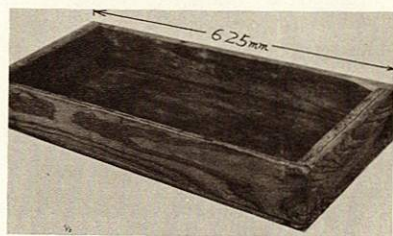


写真 19 キリダメ

繭の肉が薄くなり不揃いになる。第一、給桑の際にサンダンからカゴをひき出すのに骨が折れる。厚飼いを防ぐためには蚕の成長に従って蚕座を拡大せねばならない。蚕座を拡大することを分箔、またはオコサマヒロゲという。

一齡では眠に入る前に分箔する。明治の頃はポッチ取りといって、蚕座に焼糠をヌカブルイでふるって、その上に桑をくれて桑に蚕がたかつたところを手でポッチに取って広げた。またこのほかの方法として半掛け糸網も使用した。いずれも二倍に広げる。

二、三、四齡では各齡とも食桑の盛りの頃に一回分箔した。その方法は次の通りである。蚕座に半掛け糸網(約三六〇×一、〇五〇ミリ)といって、一枚掛け糸網を横に二つに割つたような網をカゴ一枚につき二枚かける(半掛け糸網二枚でカゴ一枚をおおう。稚蚕期に用いるものはめが細かく、壮蚕期に用いるものはめが粗い)。この後一、二回給桑して蚕が大体網の上上がったところで分箔する。まず給桑台を二台用意し、その一方にカゴに蚕座紙を敷いた新規の座を載せておく。次にサンダンから蚕のいるカゴをひき出し、もう一方の給桑台へ載せる。これには半掛け糸網が二枚かけてあるので、このうちの一枚を新規の座へ移し、それをサンダンへさす。給桑台へカゴに蚕座紙を敷いた新規の座をもう一つ載せ、ここへ残りの半掛け糸網を移して、このカゴをサンダンへさす。古い座に蚕がいるかいないかよく確かめて、蚕がいなかったらそこにあるコクンを捨てて、そしてこれが新規の座になる。この作業を順繰りに行なうてゆき、全ての分箔を完了する。二、三、四齡では半掛け糸網によって一枚のカゴにいる蚕を二倍に広げる。この作業は一人で行なう。またシリアゲも兼ねている。

大眠から起きて三日目までは分箔をせず蚕はそのままにしておく。大眠から起きて四日目頃に分箔する。これは起き立ては蚕の足が下

にしつかりくつついているので、この時無理をして動かすと足がはがれてしまうからである。五齡期の分箔には網は使わない。桑と蚕とをいっしょにお盆またはキリダメ(写真19)に取って目見当で広げる。拡大率は五分出しといって一・五倍である。五齡期ではこのほかにも座が厚いようだったら、右のように蚕をお盆に取りカゴへ移しながら広げる。

11) 糠入れ 蚕も一匹一匹成長に遅速がある。蚕を成長の遅速に従ってホンザ、オドミ、オクレと分ける。ホンザとは成長がはやくも遅くもない普通の蚕で数も一番多い。オドミとは成長がはやくて、はやくとめついでにしよう(眠に入つてしまう)ものをいい、オクレとはこの逆に成長の遅いものをいう。オドミ、オクレとも数はいくらでもない。成長に遅速のある蚕を一つの座でいっしょに飼うことは不都合である。そこで成長の遅速に従って蚕を分けて飼育するが、この蚕を分ける作業を糠入れという。糠入れは初眠、二眠、三眠、大眠の各眠に入る前に行なわれる。眠に入る頃には座の中にはとまつた蚕が少しだけ出て来る。このような時に焼糠または石灰をヌカブルイでふるってくれ、座に網(初眠、二眠、三眠の前の糠入れの時には一枚掛け糸網、大眠の前の糠入れの時には縄網を用いる)をかけ、この後二回ほど給桑してから網をあげる。すでにとまつた蚕(オドミ)は網の下の元の座にいますが、若い蚕は網の上上がったて来ると、網をあげると若い蚕とオドミとを分けることが出来る。すでにとまつた蚕は手で取って別のカゴに分け、若い蚕も網をカゴに載せ、この後三回ほど給桑すると蚕はとまる。とまつたら上に石灰をふつとめつけの座を乾かす(細谷市蔵氏)。

12) 上簇 大眠起きて九日ほどすると蚕体が透き通つて来る(このことを蚕がヒキルという)。このようにヒキリ(ひきた蚕、熟蚕)が現われたら、これらを簇まばらに入れて繭を作らせるが、ひきた蚕を簇に入れてやることを上簇、またはやとうという。「蚕はお誕生にはあがる。」といって、春蚕の場合掃立てから三〇日目頃の六月七日頃に上簇が行なわれる。上簇作業は春蚕では二日、初秋蚕では一日、晩秋蚕では二日かかるという。

上簇の作業はヒキリを拾うヒキリヒロイと、ヒキリを簇に入れる

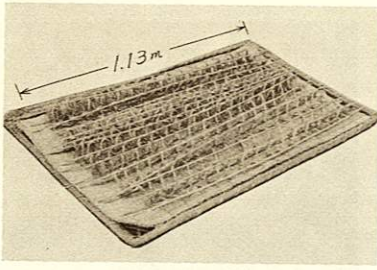


写真 22 千頭 蔴 (カゴに載せた状態)



写真 20 タテマブシ

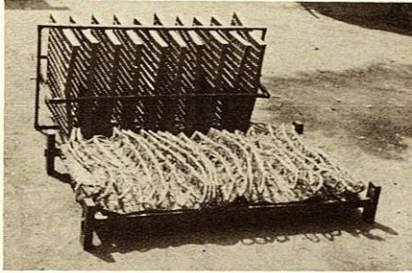


写真 23 回 転 蔴 (改 良 蔴 の 後 方 に 有 る 蔴 の 状態)

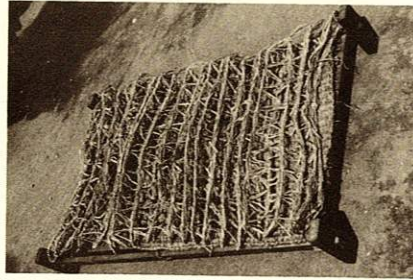


写真 21 改 良 蔴 (ツミセに載せた状態)

やとい手とよつて進められる。細谷市蔵家ではヒキリを拾うのは女衆で、家の女衆のほか近所の女衆を四、五人ほど頼んだという。これらの女衆はヒキリを頭一頭手で拾い、お盆かキリダメに入れ、やとい手である細谷氏のもとへ届ける。細谷氏はこれらの蚕を蔴にやとす。

蔴とは蚕が繭を作る時糸のかけりやすいように葉を折ったり、ポール紙を組んだりして作ったもので、福生でかつて使われていた蔴にはタテマブシ(写真20)、島田蔴(葉蔴ともいい、これには二種類ある)、改良蔴(写真21)、千頭蔴(写真22)、回転蔴(写真23)があり、このうち千頭蔴と回転蔴は現在も使われている。次にそれぞれの蔴の特徴、作り方、使用年代などについて記す。

タテマブシは写真20のように稲藁(水稲のもの)をその中心でしぼり、横にまるめて作る。明治の末頃にもまだ何軒かの家で使っていたが、それよりもっと古くからあったのではないかとされる(なお写真20に写っているものは調査時に井上東一氏に作成していただいたものだが、井上氏によればこれは本当のタテマブシとは形が少し違うそうである)。

島田蔴は稲藁(水稲のもの)製であるが、これには手折りのものと、蔴折り器(写真28)という器械を用いて作るものとの二種類があった。手折りの島田蔴は明治から大正半ば頃まで使用されていた。大きさはカゴの半分でカゴ一枚のやといには二枚使う。この蔴も手折りとはいうものの、図10のような手折りの蔴折り器を用いて作る。この蔴折り器は自分で作ることが出来る(なお図中の記号は筆者が便宜的に加えたものである)。まず

A—C方向に二、三本葉を入れ、次にB—D方向に一〇本ほど葉を入れる。F—Gのところは竹の棒を置き、B—D方向に入れた葉をこれを折り返しとしてD側に折る。同様に反対側のE—Hのところにも棒を置き、これを折り返しとして葉をB側に折る。これを数回繰り返して、折り終わったら先にA—C方向に入れておいた葉で結び、半年ほどこのままにして蔴にくせをつける。これは冬の雨、雪が降って外の仕事が出来ない時に男衆が作る。現在図10のような蔴折

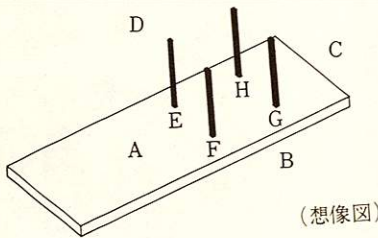


図 10 蔴 折 り 器 (手 折 り)

り器はみられないが、井上東一氏にこの島田簇の作り方を再現して
 いただったので、その模様を写真24と27として掲げる（なお写真撮
 影時は陸稲の藁を使用）。

簇折り器（写真28、二角折製簇器）を用いて作る島田簇は大正半

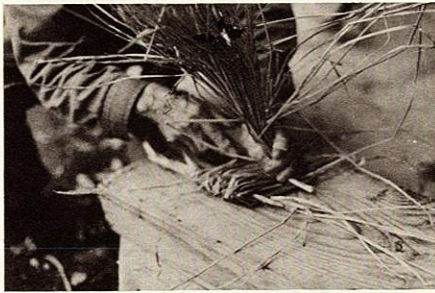


写真 26 簇の作り方 3



写真 24 簇の作り方 1

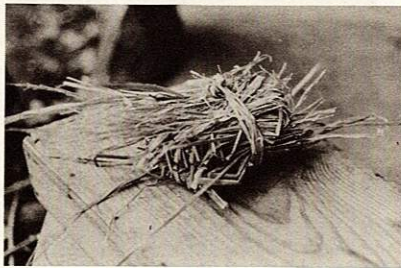


写真 27 簇の作り方 4



写真 25 簇の作り方 2

ば頃から普及した。簇の大きさはカゴ一枚分で、二〇〇×二五〇頭の蚕がやとえた。手折りの島田簇の二倍の大きさであるので、これが普及すると手折りのものはなくなっていく。この簇の折り方は、器械を使用するが、原理的には手折りのものと同様で次のようである。簇折り器の藁立ての部分をおろかせ、藁を入れたら立て、先に右のハンドルをおろす。おろしたらそれを起こし、次に左のハンドルをおろす。ひとつの藁を折るのに四、五回で足りた。あらかじめ、中央の切り込みに藁を二、三本置き、折り終わったらそれで結わえる。この簇折り器を梯子の上に乗せて作業した。するとちようど段と段の間から簇が下に落ちた。この簇も冬二月頃、男衆やサクダイが作った。結わえた簇は蚕のやといの時までタナや軒場に積んでおきくせをつけた。この簇折り器は大正時代にはあり、千頭簇の出回る昭和初期まで使用していた。なお島田簇は二種類とも一回上簇に使うと以後使用出来なかった。

次に改良簇（写真21）と呼ばれる簇が普及した。これも稲藁（水稲のもの）製であるが、一年に三回使っても五年くらいは使えたという。この簇はマブシアミキ（写真29）を用いて、冬場の雨や雪が降った時などに主に男衆が編んだ（この簇は折るといわずに編むという）。

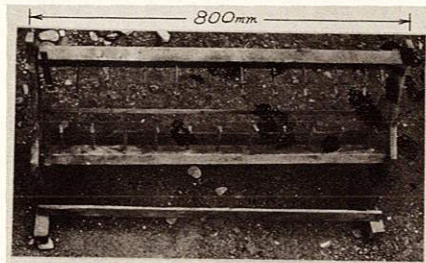


写真 29 簇編み器

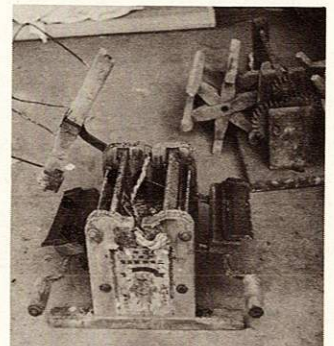


写真 28 簇折り器

この後昭和初期には現在も使用されている千頭簇(写真22)が普及する。これはまた改良簇(前述のものとは違う)ともいう。細長い竹に藁縄をからげて作ったもので、藁の山は一七、八ある。蚕が一、〇〇頭入るといっているのでこの名があるが、実際は簇一枚に四〇〇頭ぐらいやとうのが一番よいという。この簇は何回でも使える。

回転簇(写真23)は文化簇ともいい、昭和三〇年代に普及した。三〇ミリ四方の枘の中に蚕が一匹ずつ入り繭を作るようにしたポール紙製のものを一〇組ずつ枠に吊るす。千頭簇より蚕の収容力は大きい。蚕は上簇に際して体中の体液を放出するが、この体液が繭にかかると繭が赤く変色し不良繭となる。しかし回転簇の場合、横から尻を出して放出するのでほかの繭にかからなくてよい。また蚕が移動するに伴い回転するのでこの名があるが、回転すると通風がよくなり良質の繭が出来る。

上簇の仕方は簇の種類によつて異なる。タテマブシの場合はタナ(居室の上のヌキをわたしてあるところ)に穀ムシロを敷き、その上に蚕を散らしてタテマブシを載せて上簇した。繭は簇の中や下に作られる。また島田簇(写真28の簇折り器で作られるもの)の場合

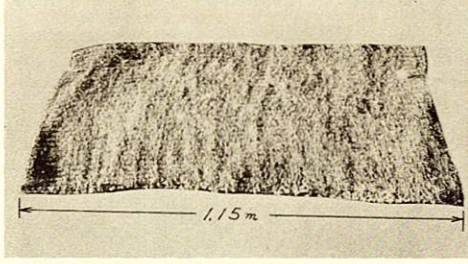


写真30 蚕ムシロ

合はカゴに蚕座紙を敷き、蚕ムシロ(写真30)、網を敷き、島田簇を載せて上簇した。千頭簇の場合は給桑台の上にカゴを載せ、カゴに蚕座紙のボロになったものを敷き、さらに蚕ムシロを敷き、この上にひきた蚕を載せる。さらにクワデ(桑の枝)をカゴに対して縦に三本並べ、この上に千頭簇を置き、簇の上にかケワラといつて藁を簇の竹に対して直角にかける。カケワラをかけ終わつたらカゴごとサンダンにさす。カゴと蚕ムシロの間に蚕座紙のボロになったものを敷くが、これはサビ止めである。先にも述べたように、蚕は上簇に

際して体液を放出し、これが繭にかかると赤くなり不良繭となる。これを防ぐために蚕ムシロを敷くが、蚕ムシロだけでは足りないのので蚕座紙のボロになったものを敷いておく。また蚕ムシロの上にクワデを入れて、簇と蚕ムシロの間を一〇ミリほどあけるが、これは蚕ムシロには蚕の放出する体液が浸み込むのでこれをその上にある繭に浸み込ませないためである。カケワラも同様の理由にもとづく。カケワラをしないと蚕は簇の下の方に繭を作りやすいが、カケワラをすると簇の上の方にも繭を作る。簇の下の方は湿つた蚕ムシロの影響を受けやすいのでカケワラをする(細谷市蔵氏)。

回転簇の場合は蚕の放出する体液を吸収するために、部屋の床に穀ムシロと蚕座紙のボロになったものを敷く。回転簇を組み立てて穀ムシロの上に立て、金属製の箕に蚕を入れて下の段から順に簇に蚕を入れてゆく。蚕はどうしても下に集まつてしまいが、全体的に平均して分布させるために上の方へ多く入れる。一時間ほどして蚕が簇の中に大体散らばつたら天井へ吊るす。床に敷いた穀ムシロと蚕座紙は蚕が繭の中に入った頃に取り除く。

このほか上簇に使用する蚕具としてはアシツキコノメ(写真31)がある。これはツミゴノメ、またシュモクともいい、木製品で、足の高さは八〇ミリである。アシツキコノメの上にムシロを敷き、簇を載せて上簇させる。足がついてい

るためにサンダンを用いずに何段にも重ねて使用出来る。13)上簇後の作業 蚕は上簇して二、三日で繭となる。先述したようにムシロは蚕の体液を吸収して湿つており、そのままに放置しておく

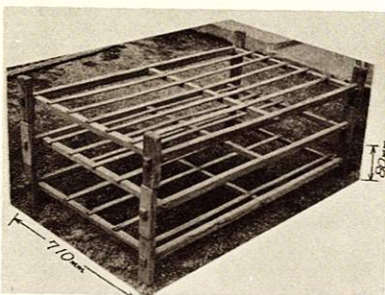


写真31 アシツキコノメ

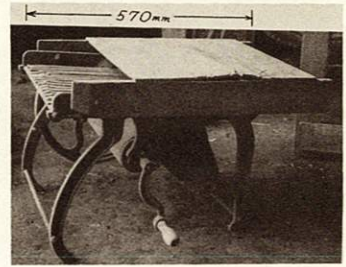


写真 32 毛羽取り器

これを選繭という。選繭が終わつたらサンダンにさしてあるカゴに蚕座紙を敷き、繭を四キロずつ計つてこの上に平らに広げておく。なお繭掻きの時には近所の女衆を四、五人頼んだという(細谷市蔵氏)。

出荷する前日に毛羽取りをした。千頭族を使用するようになると毛羽のついたまま繭掻きするようになったので、毛羽を取るために毛羽取り器(写真32)が必要となつた。毛羽取り器の使用法は次の通りである。まず右手で把手を回し、左手で箱の中に入っている繭を動かすと、ゴムに毛羽が巻きつき、毛羽の取れた繭が下に落ちる。このように普通の繭は毛羽取り器で毛羽を取るが、まだ繭の中で蛹になりきっていない蚕がいると、ハナをついてハナ汁を出しほかの繭を汚してしまうことがあるので、こうした繭の毛羽は手で取ることもある。

上族して一〇日から一日後に繭を出荷するが、出荷する日の朝にもう一度選繭を行ない、繭をユタンにつめ、大八車か牛車またはリヤカーに載せ製糸場へ運んだ。ユタンとは繭を専門に入れる袋で木綿製、麻類製のものがあり、八貫目が入つた。春蚕は蛆が出るので春蚕だけはユタンにつめなければならぬ規則だった。秋は蛆がないから籠に入れて運んでいつてもよかつた。

シロを取つた。千頭族の場合は蔭の竹をつまんで蔭を持ち上げムシロとクワデを取つた。

上族後七、八日目にはマユカキといつて蔭から繭を掻き取つた。島田族では繭の回りについている毛羽まで取つて仕上げたが、千頭族に変わつてからは毛羽のついたままかまわず繭掻きした。繭掻きと同時に繭を本繭(製糸場へ出荷する繭)とその他の繭(玉繭、サビなど)に分け、それぞれの繭をサルやお盆に入れる。

以上がザソウの春蚕を中心とした飼育の模様である。初秋蚕、晩秋蚕においても飼育法はほぼ同じなのでここでは省くことにする。なおザソウの各作業で使用される主な蚕具を表1に列挙した。またこれらの蚕具の入手方法について次に簡単に述べる。

ザソウの当時、福生駅前には荒物屋が何軒もあり、そこで蚕ムシロ、給桑台、千頭族といつた蚕の必要品を売つていた。コノメ(三註①参照)やアシツキコノメは大工が、カゴは籠屋で作つていた。ツメは金物屋で売つていた。また行商が箱根ヶ崎などから来たが、彼らも蚕具を持つて来た。

(4)新しい飼育法

1) 壮蚕条桑育 福生でザソウからこの方法に変化した時期については三(1)飼育法の変遷で触れた。ここでは飼育法について触れていくが、これは家々によつてまちまちであるので概略に沿つて記す。一齡から三齡まではサンダンにカゴをさしてこの上で蚕を飼育し、桑も細かくきざんで与えるが、四齡または五齡以上になると、給桑に際して桑を枝ごと与え、また蚕座もザソウと違つて特殊なものを用意するなど、全体的に著しく省力的な方法である。蚕座はあり合わせの竹か丸太の上にカゴやスノコなどを載せ、この上にムシロまたは蚕座紙を敷いて作る。この蚕座を段と段の間を七〇〇〜九〇〇ミリとして二段または最高三段作る。現在は蚕座を一段とする場合もある。蚕座の横の長さは家の都合によるが、なるべく長くした方が能率的である。条桑育は家の中よりも、物置きや小屋などで行なう。

2) 稚蚕共同飼育 福生では稚蚕の飼育をコバソダテという。「コバソダテさえしつかりすれば後は大丈夫だ。」というくらいで、コバソダテは難しい上に、蚕作や繭質に大きな影響を与えるので、特に注意して飼育する必要があるという。

そこで稚蚕期の飼育を優秀な技術員のもとで共同して行なう稚蚕共同飼育が戦後全国的に増加した。これは「ふつうは1、2令を共同で飼育し、2眠中或は3令になつてから、希望数量の蚕児を各農家に配分し、それ以後は各農家で別々に飼育する」というもので、福生においてもほぼ同様である。

表 1 各作業で使用される主な蚕具

作 業		主 な 蚕 具	
掃 立 て		カゴ、ハترون紙、フルイ、羽根ボウキ	
第一齡～第五齡	暖 房	タカゴ・ ジ・ 蠶座紙 竹	蠶ヒバチ、レンタンコンロ
	給 桑		給桑台
	除 沙		一枚掛け糸網、繩網
	分 箔		半掛け糸網、お盆またはキリダメ ヌカブルイ
	糠 入 れ		ヌカブルイ、一枚掛け糸網、繩網
上 蔭	お盆またはキリダメ 蔭——タテマブシ、島田蔭（二種ある） 改良蔭、千頭蔭、回蔭 アシツキノメ		
毛羽取り		毛羽取り器	
出 荷		ユタン、籠（秋） 大八車、ウシグルマ、リヤカー	
桑	採 桑	桑切り鎌（春）、ツメ（秋） クワツミビク、クズハキカゴ 手車、馬力、ウシグルマ、リヤカー	
	調 桑	クワコキ（二種ある、春） まな板、包丁、割桑器	
蔭 製 作		手折りの蔭折り器（図10） 蔭折り器（写真28） 蔭編み器	

福生では早くは太平洋戦争中に稚蚕共同飼育に移行したところもあつたが、一般に普及したのは昭和三〇年代であるという。養蚕組合を通じて、川崎、羽村、瑞穂などにある稚蚕共同飼育所に委託した。この場合、飼育所から二眠とまりついた頃の蚕が届く。また戦後、南養蚕組合が平井初五郎氏宅の蚕室を借りて稚蚕共同飼育を行

なつた。各養蚕農家はここでクワクレなどの作業をし、二眠の蚕が各農家に配られた。現在福生の四軒の養蚕農家は瑞穂にある稚蚕共同飼育所から配蚕をうける。蚕の量を農協を通じて飼育所へ申し込んでおく。配蚕の日が決まると木村源治氏が飼育所へ四軒分の蚕をまとめて取りに行き、ほかの三軒へ配る。

以上みたように、現在福生では、稚蚕期は稚蚕共同飼育所へ飼育し、飼育所から養蚕農家へ二眠起きの蚕が届き、農家では三齡以降の蚕を飼育し、壮蚕期は条蚕育を行なっている。

なお現在の飼育法については、章末に井上東一家における昭和五三年春蚕飼育の状況について報告したのでそちらを参照して下さい。

註①

カゴは蚕箔の一種であるが、福生では写真4、5のような竹製のカゴを使用する以前の明治時代には木製の蚕箔を使用していた。この蚕箔はコノメといつて、現在みられるアシツキノメ（写真31）の足のないもののような形をしており、回りに枠があつて、中には棧が縦は一本、横に数本渡してある。めが粗いのでこの上には蚕ムシロを敷いた。サンダンにさして用いたが、出し入れがやりにくかつたという。大正時代にはコノメに代わつて今みるカゴをどこの家でも使うようになった。これは竹で出来ているのでサンダンからひき出しやすい。またコノメに比べてめが細かいのでこの上には蚕ムシロでなく蚕座紙を敷く。蚕座紙も大正中頃に出て来た。

このように蚕箔は時代に従つて変化したわけだが、現在でもカゴ（写真4、5）のことをコノメと呼ぶ場合がある。これについては

蚕箔は木製のものから竹製のものへと変化した。その機能は同じなので、以前の名称が残ったものではないかと考える。

蚕ムシロはまた四尺ムシロともいう。カゴには蚕座紙を敷くので、カゴを使用するようになってからは蚕ムシロの用途はせばまり、上族時の蚕の小便（体液）除けなどに用いられる。現在も上族時に同じ目的で使用されている。なお本章では簡単のためにただムシロという時は、大体において穀ムシロでなく蚕ムシロをさしています。

② 現在は蚕を居室以外の小屋などで飼育するが以前は居室内で飼育した。そのため蚕の忙しい時は蚕の間に寝たという。また蚕中は家の中で糞ゾウリを履いたという。これは蚕以外の時は履かない。居室以外に特に蚕室をもっているのは資産のある人だけであったという。

③ ハトロン紙とは蚕座紙と同じ大きさをドウが塗つてあるものである。蚕が小さい時に蚕の下に敷くなど用途は広い。稚蚕期の蚕は毛蚕けいといつて、蚕座紙だと蚕が紙にくっついてしまうので、これを防ぐためにロウの塗つてあるハトロン紙を用いる。

④ 催青とは、管理された環境条件下で蚕種を孵化させることをいう（農政調査委員会農業百科辞典編纂室編纂『体系農業百科辞典 III 畜産・養蚕』八五〇頁による）。井上東一氏によると、昭和三、四年頃の一時期に牛浜養蚕組合が催青を共同で行なつたことがあるという。四月の中頃に室を目貼りし、サンダンにカゴをさし、ムシロを敷いてこの上に蚕種紙を並べておく。炭をたいてその上に鍋をかけて水蒸気を出し、温度を七五度Fぐらいにしたという。

また田村富十郎氏によると、大正時代は自分であおませたという。

⑤ 大正一三年頃、七、八軒の養蚕農家が合力して、蚕種製造の技術者を招いて、蚕種の製造、販売などを行なうことを目的として、改進組という蚕種屋の組合を結成した。

改進組では秋に蚕種をとり、冬の間は改進組が共同で建てた土蔵に貯蔵し、翌年春蚕の前に改進組に属する家の蚕室を借りて改進組共同で催青を行ない、催青させた蚕種を養蚕農家へ配る。

改進組を構成する個々の蚕種屋では二、三人のサクメイ（サクダイ、作男）を使っていたが、これがガイコウとなつて養蚕農家を回り、蚕種の注文、配布、蚕種代の徴収などを行なつた。ガイコウの歩いた範囲は福生、熊川はもちろん、瑞穂、秋川、八王子などの地方一帯である。また蚕種屋にとつてお得意にあたる養蚕農家のことをツボという。蚕種代は養蚕農家の繭代から支払つてもらふ。農家で違蚕があると蚕種代が払えなくなつたりすることがあるが、こうした時は蚕種屋と農家の両者が話しあつて決めた。そこで蚕種屋としてはツボで違蚕があると損害となることもあるので、違蚕とならないようにツボへ蚕の指導員を派遣したという。

またこのように一つの組合を作つたわけは、蛆病によつて蚕種が作れないということもあり、八軒がまとまつていればたとえそのうちの軒に蛆病が出て蚕種が作れなくてもほかの七軒が不足分を補うことが出来るので、相互扶助のためにまとまつたという。

蚕種をとる蚕に与える桑は蛆病などの病原菌のついていないものを使わなくてはならないが、こうした桑は福生では求めにくく、砂地である河原か、秋川のものなどを使つた（木村源治氏）。

⑥ 『体系農業百科辞典 III 畜産・養蚕』八二二頁。

⑦ 青木清、有賀久雄、浜田成義、桑名寿一、中川房吉共著『蚕系技術事典』一七一頁。

⑧ シリアゲの時、網をかける前に糠をくれることがあるが、網をかける前に糠をくれる場合（井上東一氏）と雨が続きたりして座がしけつた時は糠をくれるが、普段はほとんど糠をくれないし、また五齡のシリアゲの時にも糠

をくれないという場合（細谷市蔵氏）とがある。

糠には戦前は焼糠（粃殻を焼いたもの）を用いたが、昭和三〇年頃から石灰を使用するようになったという（井上東一氏）。

⑨ 分箔の時、糸網をかける前に焼糠をくれることがあるが、細谷市蔵氏によると、しけつている時は焼糠をくれるが、これはくれてもくれないともよいという。

⑩ 蚕座一枚の三分の一の蚕を蚕座二枚分取り、これを蚕座一枚に広げる。また全体の三分の一の蚕を取った残りの三分の二の蚕も一枚分に広げる。このため両者とも元の面積の一・五倍に広がることになる。これを五分出しという。

⑪ 糠入れの時にくれる焼糠または石灰は、網と残桑とがくつついてしまうのを防ぐためと、座を乾燥させるためのものである。また特に初眠の前の糠入れの時は、糠入れの前に焼糠を一度フルイでふるって細かいものを選び分け、これを糠入れの時フルイでふるってくれる（細谷市蔵氏）。

⑫ ヒキリを拾うのに家の女衆だけでは間に合わないので近所の女衆を頼んだ。農家はどこでも養蚕をしており大体同じ日に上簇するので、農家同士がお互い助けあうことは稀で、農家以外の家の女衆を頼んだという。日当は五〇銭でお昼とお茶が出た（細谷市蔵氏）。

⑬ キリダメは上簇時にひきた蚕を拾ってこの中に入れ、やとの場所まで運ぶ時などに使用される。上簇時にキリダメを使用する以前は木製のお盆を使った。島田蔭一枚分の蚕の量はお盆一枚分に相当する。その後蚕を盛んにやるようになつてからは、お盆では間に合わなくなつてキリダメを使うようになつた。キリダメなら二つくらい重ねて運ぶことも出来、はかがいってよいという。お盆とキリダメを併用することもあつた。

⑭ 島田蔭を用いて上簇する時も室だけでは場所が足りない場合はタナを使ったこともある。また一蚕終わつたら蚕具をタナに上げておいた。

⑬ 『蚕系技術事典』 一六二頁。

四 繭の出荷

(1) 繭の取引

本繭は製糸場へ出荷するが、悪い繭（玉繭など）は即座師（繭の仲買人）に渡すか、家で糸にひいた。

昔は養蚕農家が製糸場へ繭をもつていき直接交渉した。この時見本としてよい繭を一貫目ほどもつていき、製糸場では繭の肉や光沢をみて値を決めた。その値で納得出来れば次の日に製糸場へ繭をもつていく。三多摩地方では熊川に製糸場が集中していたため、立川、砂川、瑞穂、羽村、秋川、五日市など三多摩地方から熊川の製糸場へ繭をもつて来た。見本を見せる時は順番待ちであつたので、製糸場の前には長い行列が出来、へたをすると朝から晩まで待たされることもあつた。そういう時は繭に変化が起こりはしないかと気がではなかつたという。また一つの製糸場で繭の折り合いがつかない時は、ほかの製糸場へ行つて再交渉するが、生繭であるので早く製糸場に引き取ってもらわないと蛾が発生して来るので、養蚕家は時間に余裕がなく、製糸家より弱い立場にあつたという。

この後取引の方法が変化し、養蚕農家、製糸場の代表者、福生養蚕組合の役員三者立ち合いのもとで、製糸場の代表者が繭の重量を計つたり、それを帳簿につけたりするようになった。これは中福生会館で行なつていた。昭和六年以後は立川の繭検定所へ繭を一キロもつていき、そこで糸目などを勘定して、繭の値が決まるようになった。

現在（昭和五四年）は中福生会館の前にある養蚕志茂出荷場へ養蚕農家四軒が繭の総荷をもつていく。養蚕農家、農協、秋川指導所、片倉製糸の四者立ち会いのもとで、農家一軒ごとに検定用として繭を一升ほど提供し、秋川の指導所が検定し、その結果値が決まる。総荷は片倉製糸がもつていく。

(2) 製糸場

昭和初年に熊川に片倉製糸の工場が出来る前は、熊川に森田製糸

山八製糸、山周製糸、福生に笹木製糸があつた。これらのうち森田製糸が最も大きく、釜が五〇〇釜あり、女工は四〇〇人くらいいたという。山八製糸は三〇〇釜、山周製糸は八〇釜あつたという。

これらの工場で働く女工たちの休みは月に一日と一五日の二日きりだつた。出身は信州、山梨(北・南巨摩、塩山、勝沼、都留など)、神奈川(相模原、厚木、座間など)などで、地元の人はいないなかつた。糸ひきに来て、この土地で嫁になつた人も多いという。

これらの製糸場は大正時代に盛んだつたが、昭和初年の繭価の暴落に伴い閉鎖し、その代わりに大手の片倉製糸の工場が熊川に出現した。しかし片倉の工場も昭和一八年頃には軍需工場に変わったという。

五 養蚕にみる社会生活

(1) 養蚕組合

養蚕農家の便宜をはかることを目的とした養蚕組合という団体が戦前から近年に至るまであつた。

以前は福生養蚕組合が福生全体を統轄し、この下に支部として南養蚕組合、牛浜養蚕組合、志茂養蚕組合などがあつた。福生養蚕組合には組合長がいた。また支部にも組合長がおり、この下に班長が四、五人いた。一班は養蚕農家五、六軒で構成され、班長がこれととりまとめた。福生養蚕組合は他町村の養蚕組合とともに東京都養蚕連合会に統轄された。昭和四六年に東京都養蚕連合会が解散したので、それに伴い福生養蚕組合も福生農協の養蚕部へ移行した。

養蚕組合は養蚕農家の便宜をはかるためにいろいろとしたが、蚕種や蚕具などは養蚕農家が個別に購入するより養蚕組合として一括購入した方が安価であるのでよく一括購入をしたという。その場合支部の班長が班内の農家を回つて注文をとり、これを帳面につけて組合長へ報告する。組合長はこれを福生養蚕組合に届け、福生養蚕組合ではこれらをもとに業者へおの品の品物を注文する。福生養蚕組合から各支部へ注文の品が届くと、組合長がこの旨を班長へ触れ、班長は班内の農家へ触れて回り、各農家が注文した品物を支部へ取

りにいつた。

(2) 養蚕従事者

家族以外の農作業従事者としてはサクダイがいた。サクダイは養蚕だけではなく、畑仕事やそのほかの仕事を一年中していた。これに似たものにコゾウ(小僧)があつた。学校を卒えてすぐに来た人である。コゾウは檜原の人が多かつたという(井上東一氏)。

これらとは違って養蚕の時だけ手伝いに来る人たちがいた。たとえはヤゼットといつて、一蚕のはじめから終わりまでいて養蚕の手伝いをした人たちがいた。福生や瑞穂の人が多かつたといひ、泊り込みと通いと両方あつて、男女いづれも手伝いに来たという。大眠以後の忙しい時には頼みつけという人たちが手伝いに来た。森田惣助家では毎年大体同じ人たちが七人ほど来て手伝つたという。また上簇時には近所の女衆がヒキリヒロイとして手伝いに来た。繭掻きにも近所の女衆が手伝いに来た。

女衆の方が養蚕に明るいという(石川定七氏)。稚蚕期のクワクレ、シリアゲは女衆がする。壮蚕期のクワクレは男衆も手伝う。女衆は蚕が始まると掃立てからかかりつきりであり、しかもこの間に炊事、洗濯などがあるので大変忙しいという。男衆は桑畑の雑草を取るなど主に桑の手入れをする(野島ハマ氏)。

(3) 養蚕教師(指導員)

養蚕教師のことをケークの先生という。春蚕なら春蚕一蚕全て指導する。養蚕教師には埼玉県の八高線沿線の人が多く、山梨からも来たという。また高埼玉平氏の御息である高橋弥一氏のもとで春蚕を習つたという人が、養蚕教師として砂川(立川市)にも回つて来たという(井上ナヲ氏)。

(4) 蚕休みなど

五齢期は食桑量が最も多く忙しい。養蚕の盛んな頃、春蚕の五齢期に蚕休みといつて小学校が一週間ほど休みになり、子どもたちは子守りをしたり、養蚕を手伝つたりした。

また蚕を飼育している最中は忙しいので、金でも肥料でもみな借りて、蚕が済んでから支払つた。しかしもしも違蚕ともなれば全て借金となつてしまひ、苦しい場合もあつたという。

註1 志茂養蚕組合の会計簿をみると、記載が大正一三年から始

まっております、また大正一三年に「志茂養蚕組合」及び「志茂養蚕組合長」の印鑑を作った記事があるので、志茂養蚕組合は大正一三年頃に成立したものとと思われる。

② 牛浜養蚕組合の構成農家は昭和初期に四〇戸を数えたとい

六年中行事・信仰

繭玉 一月一三日に米をひいて粉にし、繭玉という団子を作った。

繭や里芋がよく出来るようにと、団子をそれらに似せて作る。一日、石臼にカンカツゲかナラの木の枝をさし、この枝に繭玉をさして居間の中央に置く。② 一六日にマユカキといって繭玉を枝から取り、焼くなどして食べる（井上東一氏）。

① 繭玉をさす木の種類は家々によりまちまちである。野島ハマ氏によると梅の木も用いたという。また井上東一氏によると、ツゲは「代々継ぐ」、ナラは「(作物が)よくなるように…」という意味が込められているという。

② 現在井上東一家では、繭玉は木の枝にはささず、トオケに入れてオシラサマ(オカイコガミサマともいい、掛軸である)に供える。

(繭玉については、福生市教育委員会編集発行『福生市の民俗―年中行事』にすでに報告例があるので、ここでは既報告以外の事例を記しました)

目無し達磨 達磨の両目のうち左目を塗って入れ、蚕がよく出来れば右目も入れるので守ってほしいといってお願をたてた。達磨は拜島の大師様で一月二日に買った。ここで買えない時は高幡不動(一月二八日が縁日)まで行って買って来た。古い達磨はサイノカミ(一月七日)の時に集め、ダンゴ焼き(一月一四日)の時に燃やした。

蚕日待 オシラ講、団子日待ともい^①。年一回、春蚕を掃立てる前の四月中旬から末頃の間に行な^①。南なら南という部落の中の

養蚕農家の女衆が宿へ集まった。宿は回り番(年番)で、座敷が二つもあるような大きな家が選ばれた。宿に集まる女衆は米(一人当たり二合)、味噌、醤油を持参し、お金を出しあつておかずを買い、宿の人が五目飯、とうふ汁、団子のような御馳走を作り、それらを食べながら雑談した。

① 木村源治氏(志茂)によると春、秋の年二回行ない、男女とも集まったという。また井上東一氏(熊牛)によると正月に蚕日待をしたという。

② 木村源治氏によるとコカゲサンの掛軸を掛けて蚕日待をしたというが細谷市蔵氏によると南では掛軸は掛けなかつたという。

スストリマユダマ 春蚕を掃立てる前、ススハライが終わると、餅の饅頭、草の葉の饅頭、米の粉の団子などを重箱につめて、親戚や近所の家とやりとりした。これは春蚕掃立て前に行なうススハライ(スストリともいう。大掃除のこと。ススハライは暮とこの時と年二回行なう)と関連した行事であるという。また春蚕を掃立てた後でスストリマユダマの行事を行なう家もあつた(細谷市蔵氏)。

このほか、掃立ての日には赤飯をたいたという。

また蚕が眠に入ると繭玉を作り、養蚕の神に供えたという。蚕を掃立てて二、三回とまると繭玉をオシラサマに供える(井上東一氏)。蚕がとまるたびに繭玉をこさえて神様にあげた。蚕室にはコカゲサンが貼つてあつた(野島ハマ氏)。

現在、福生の養蚕農家四軒は、日は特に決まっていな^①が、四月か一〇月頃宴会をする。この時養蚕指導所から養蚕に関する映画をもつて来て映写会をする。

現在幸楽園の中にコカゲサンという小祠があるが、これは製糸業が盛んに行なわれていた大正五年に、製糸家森田氏が自身の別荘(現在幸楽園となつている)の中に建立したものである。

七 現在の飼育法——井上東一家における昭和五三年春蚕飼育についての調査報告——

昭和五三年五月中旬から六月中旬にかけて前後五回にわたり、井上東一家（熊牛）における春蚕飼育の状況を調査させていただいたので、ここにその結果を現在の飼育法として報告する。

稚蚕期は稚蚕共同飼育所で飼育するので、井上氏は三齡以降の蚕を自家で飼育する。また春蚕と晩秋蚕の年二回の飼育を行ない、両蚕期とも条桑育の年間条桑育で、桑も春秋兼用桑のみを栽培している。

昭和五三年の春蚕飼育日程については図11に示した。五月一七日に瑞穂の稚蚕共同飼育所から二眠起きの蚕が届き、三齡、四齡、五齡と飼育して、六月八、九日の両日に上蔭を行ない、約一週間後に收繭（マユカキのこと）し、六月一八日に繭を出荷した。

井上東一家の屋敷、小屋などの配置は図12に示した通り、二階建ての母屋を中心に、南側に小屋A・B（写真33、左II A、右II B、なおこれらの記号は筆者が便宜上用いるものである）があり、道路に沿って小屋C、母屋の裏側に貸家と並んで小屋Dがある。図12のEには養蚕をしない時にツミゴノメを収納する。このほか小川を隔てた向こう側の畑地に桑園があるが、桑園はこのほかのところにもある。

以下、蚕の成長に従って春蚕飼育の状況を記していく。

三齡期では蚕室はまだ小屋Aだけを使用している。小屋Aの南側にはガラス戸があり、さらにその外側に戸があり、両方とも閉めきつて外気の侵入を防いでいる（調査時には写真撮影の採光のため、外側の戸だけあけていただいた）。室内にはヒバチを置き温度調節を行なっている（写真34）。蚕座は上下二段、一列である。タテジなどを立て、これに丸太を結わえつけ、この上にカゴまたは普通の板を載せ、ムシロを敷き、その上に紙（本来なら蚕座紙を敷くのだが、現在は豚の飼料袋の紙を代用しているという）を敷き、蚕を飼育する。蚕座面積はカゴ数枚分で、蚕座は上段全体と下段の約半分ほどに広がっている。給桑の際は、桑葉が数枚ついている全芽を

日付	5月17 18	22 23	28 30	6月8 9	15 16	18
飼育経過	三眠		四眠	上蔭	收繭	出荷
	第三齡	第四齡	大眠	第五齡		
給桑状態	全芽		条桑			

図 11 昭和 53 年 春 蚕 の 日 程

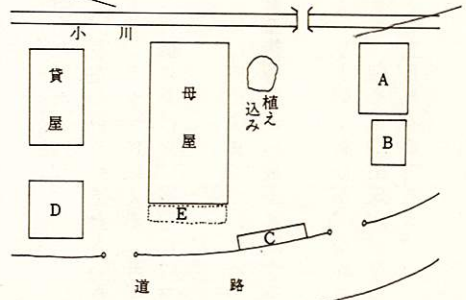


図 12 井上東一家の見取り図

与える。

四齡期も蚕室は三齡期と同様小屋Aだけを使用し、周囲は閉めきられ、ヒバチにより温度調節がなされている。しかし蚕の成長に伴い蚕座面積は拡大し、蚕座は上下二段で二列となる（写真35）。なお成育の遅れた蚕が少しだけ出始めたので、これらの蚕を別のカゴに分けて飼育する。桑は桑切り鎌で枝条を伐採し、家へ運び、写真36のように枝条から芽を素手でこき落とす。

給桑は三齡期同様全芽を与える。一日朝、昼、晩の三回、蚕が見えなくなる程度に与える（写真37）。なお桑園は蚕齢が進むにつれて伐採されてゆくが、春蚕ではサクヌキといって一列置きに枝を切つてゆく。こうすると風が抜けるので桑に実が入つてよいという。写真38はそれで、四齡期の桑園の状態を示す。



写真 35 蚕四齡期



写真 33 小屋 A・B



写真 36 桑扱き



写真 34 蚕三齡期

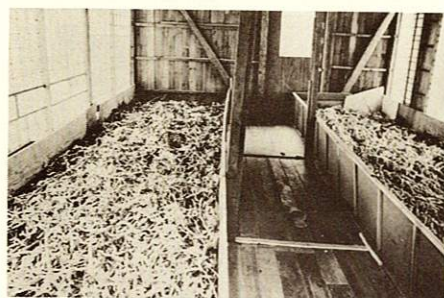


写真 39 五齡期の蚕座



写真 37 四齡期の給桑



写真 40 五齡期の給桑



写真 38 サクヌキ

五齡期になると桑育に移行するとともに、蚕の成長も著しくなり蚕座面積も拡大する。蚕室は小屋Aだけでなく、B、C、Dの全てを使用するようになる。蚕座は一段となつて、その両側には高さ三〇〇ミリばかりの板を取りつけ、また両端はそのまま小屋の壁と

なるか、板を取りつけることによつて、全体として箱のようなものとなる(写真39)。井上氏によれば周囲を板で囲えば蚕が桑条(桑の板)を伝わつたりなどして外へ落ちることがないという。給桑はいままでとは異なり、桑を枝のまま与える。以前は桑の枝

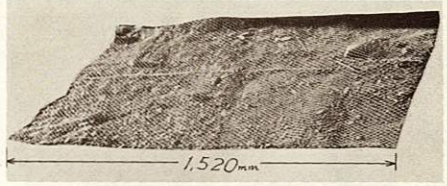


写真 41 ビニール網



写真 42 上蔭 1

を蚕座に對して縦に、井上氏によればこうすると枝の鋭い切り口が蚕に当たり、蚕がけがをすることがあるという。そこでこれを防ぐために現在では次

のように給桑する。給桑のはじめに蚕座の端の部分に桑条を縦に置く。これをマクラという。枕の方に桑条の切り口を向け、切り口を枕の上に載せ、桑条を蚕座に対して横にくれる。こうして順々に桑条の上に切り口を載せ、横にくれていく(写真40)。こうすると蚕には葉の部分が当たるのでけがはしない。しかし次の給桑の時も同じようにすると蚕座に傾きが生ずる。蚕座は水平状態を保たないといけないので、次の給桑の時には前回とは反対の側に枕を作り、桑条も逆の方向にくれていく。

五齡期は蚕が桑葉を最もよく食べる時期なので桑切りも忙しく、桑園はほとんど伐採されている。

ザソウと違って除沙は頻繁には行なわれない。除沙用の網としてビニール網(写真41)を用い、三齡、四齡とも眠除一回行なう。除沙する日の前の晩に、蚕座全体にビニール網をかけて、この後二度ほど給桑し、蚕が大体網の上になつたところで除沙を行なう。五齡は除沙を行なわない。そのため上蔭作業後は写真42のように蚕糞や、桑の枝などが残っている。なお除沙は同時に分箔も兼ねており、蚕座面積は四齡は三齡の二倍、五齡は四齡の一・五倍(五分出し)に



写真 43 上蔭 2



写真 44 上蔭 3

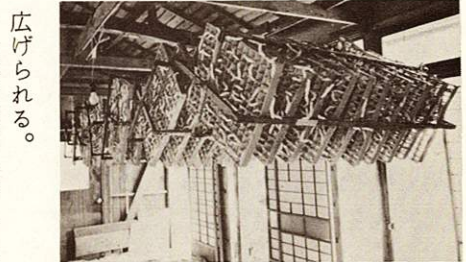


写真 45 上蔭 4

作ろうとして網の上へ上がって来る。こうして蚕が網の上へ上がったらビニール網を二人でもち上げて蚕を拾う。蚕座の奥の方に残った蚕は、写真42のように手で一頭一頭拾う。こうして集めた蚕をキリダメに入れ、やとの場所へもってゆく。

現在井上家では、回転族と千頭族が用いられている。回転族は小屋Bに設けられるが、この族に上蔭する場合は、蚕をキリダメから小屋Bの床の上に敷いてある御座の上に移し、小さな板の上に載せ(写真43)、すでに壁に立てかけてある回転族の上にあたる落とす(写真44)。こうして蚕は回転族の柀に入る。このようにして次々と回転族をいっぱいにしてゆき、蚕でいっぱいになった族を天井

広げられる。上蔭は六月八、九日の両日に行なわれた。井上東一氏をはじめ夫人など総勢五人ほどで作業が行なわれていた。上蔭の仕方は次の通りである。ひきた蚕が出始めたところで桑をくれ、蚕座にビニール網をかける。ひきた蚕は巢を

から吊り下げる（写真45）。また蚕は上族に際して体液を放出するので、族の下の床には紙を敷いておく。
 千頭族に上族する場合、二通りの仕方がある。一方はカゴに千頭族を載せサンダンにさすもので、今一方はツミゴノメに千頭族を載



写真 48 上族 7

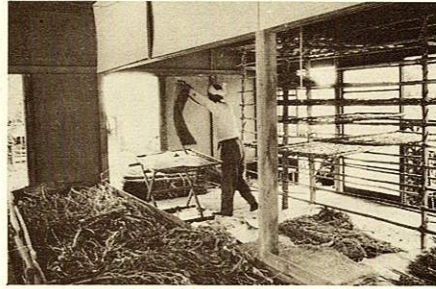


写真 46 上族 5



写真 49 上族 8

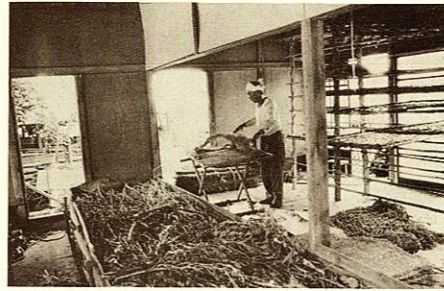


写真 47 上族 6

せるものである。

カゴに千頭族を載せて上族するものは、小屋Aで作業が行なわれ、小屋Aに設けられるが、その上族の仕方は次のようである。まず給桑台にカゴを載せ、カゴの上に新聞紙を三枚敷く。その上にムシロを敷き（写真46）、さらに縄網を敷く（写真47）。ここでキリダメから蚕を取り出し網の上に撒く（写真48）。この上に千頭族を載せ（写真49）、さらにその上にカケワラといって陸稻の葉を族の竹に對して直角にかけてゆく（写真50）。カケワラをかけ終わつたらカゴをサンダンにさす（写真51）。カケワラをこのようにかけると族がよらないし、またカケワラと族の間にも繭を作るという。カゴの上に敷いた新聞紙は近年になつて始めたものだが、ムシロと同様に蚕が上族時に放出する体液を吸収するためのものである。新聞紙とムシロは上族後二日ぐらいで抜き取る。そのままにしておくと湿気が残り、繭に悪いからである。

ツミゴノメに千頭族を載せて上族するものは小屋Dに設けられていた。ツミゴノメの上には新聞紙、ムシロ、千頭族、カケワラが順に載つていた（写真52）。ツミゴノメは九段積んだものと六段のものがあつた。なお小屋Cでは上族は行なわれない。

上族した蚕は二、三日後には繭になつている（写真53）。

上族してから約一週間た



写真 51 上族 10

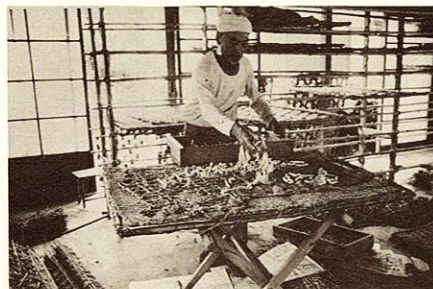


写真 50 上族 9

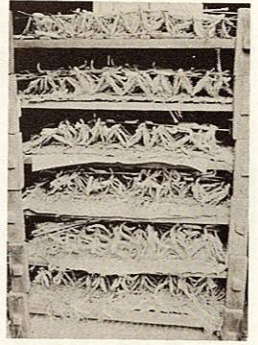


写真 52 上 蔭 11

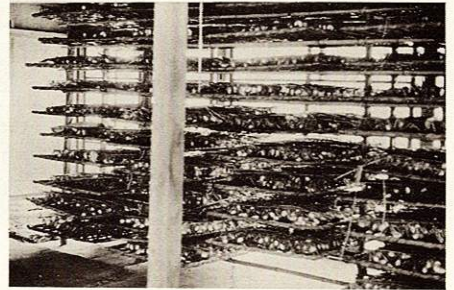


写真 53 蔭



写真 54 蔭 掻き

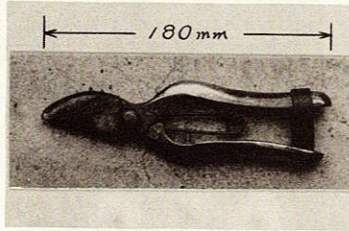


写真 55 センテイ
セバサミ

つた六月一五、一六の両日に収蔭が行なわれた。井上東一氏、夫人などが、小屋Dで作業されていた(写真54)。掻いた蔭はかたわらのキリダメに集める。蔭を掻き終わったら、千頭蔭は一つ一つ葉でしばり横に置く。

蔭はこの後六月一八日に出荷した。

註① これは三齡期も同様である。

なお晩秋蚕では一本の枝条の半分ぐらいのところをセンチ

イバサミ(写真55)で切り、三齡のはじめからこれを与える。

△参考文献▽

- 渡辺勤次 『養蚕学』 アヅミ書房 昭和二八年
- 青木清、有賀久雄、浜田成義、桑名寿一、中川房吉共著 『蚕糸技術事典』 アヅミ書房 昭和三七年
- 農政調査委員会農業百科辞典編纂室編纂 『体系農業百科辞典 III 畜産・養蚕』 昭和四二年
- 農業発達史調査会編 『日本農業発達史5』 中央公論社 昭和三〇年
- 『日本民俗学大系5 生業』 平凡社 昭和三四年
- 『体系日本史叢書11 産業史2』 山川出版社 昭和四〇年
- 福生町誌編集委員会編 『福生町誌』 昭和三五年
- 福生市教育委員会編集発行 『福生市の民俗 年中行事』 昭和五〇年
- 福生市教育委員会編集発行 『福生村誌稿・熊川村誌稿』 昭和五一年